

## 水俣病闘争（1970～1973）の3つのキーワード

### 1 個別性

水俣天草地域においてチッソという私企業によって引き起こされた個別水俣病事件として取り組む

高度工業化社会によって引き起こされた「公害」として一般化しない  
「反公害闘争」と一般化しない

### 2 直接性

水俣病事件は、近代法上においてはチッソに対する「損害賠償請求事件」として代理人（弁護士）によって裁判で争われた

水俣病によって殺された死者や患者・家族の積年の思いを、裁判以外に、如何にして「直接的」に表現することが可能かを追求した

厚生省保障処理委員会の調停案の実力阻止（1970年5月25日）

チッソ株主総会での直接抗議（1970年11月）

チッソ東京本社を占拠しての自主交渉（1971年～1973年）

### 3 異形性

「水俣病闘争」を他の近代的な市民運動から際立たせていたものが、「怨」や「死民」に象徴される「異形性」だった。株主総会には白装束の巡礼姿で「ご詠歌」

「異形」というのは、「近代」という一つの運動が、その論理の整合性や明晰性を追求する過程で排除していった諸々のことである

石牟礼道子という存在

石牟礼道子という存在がなければ、水俣病事件は、チッソに対する「損害賠償請求事件」にとどまったのではないか。

「ありとあらゆる賤民の名を冠せられ続け、おのれ自身の流血や吐血で、魂を浄めてきたものの子孫たちが殺されつつあった。かつて一度も歴史の面に立ちあらわれることなく、しかも人類史を網羅的に養ってきた血脈たちが、ほろびようとしていた」（「苦海浄土」第二部「神々の村」）

「時の流れの表に出て、しかとは自分を主張したことがないゆえに、探し出されたこともない精神の秘境が、人々の心の中にまだ保たれていた」（同）

「学校教育というシステムに組み込まれることのない人間という風土。山野の精霊たちのような、存在の原初としかいいようのない資質の人々が、数限りなくそこにいる。愚者のふりをして」（同）

「黙っとる世界の方が、なんちゅうか、ゆたかじゃし。石のごたる者の心が深かかもしれん、オラそげんおもうばい」（同、患者の言葉）

「一人の人間に原罪があるとすれば、運動などというものは、なんと抱ききれない劫罪を生んでゆくことか。人の心の珠玉のようなものをも、踏みくだかすにはいないという意味で」（同）

「市民会議の限界を補強する、もう一つバネのきいた行動集団を、いよいよ発足させねばならぬ時期になっていた。組織エゴイズムを生ましめない、絶対無私の集団を。（略）いっさいの戦術は、この国の下層民が、いまだ状況に対して公に表明したことのない、初心の志を体し、先取りしたものでなければならぬ」

「これにかかわるとすれば、思想と行動とは、その人間の全生涯をかけたある結晶作用を強いられる。そのような集団をつくれるだろうか、つくらねばならぬ、とわたしはおもっていた」（同）